

アフリカの人々と名付け 24

植民地、統治、名前、身体

小馬 徹

植民地支配と「部族」の創出

アフリカの小規模な伝統社会の群れの上に植民地や「国民国家」という近代の大きな国際政治の枠組みが被せられた時に、自他の規定や分類に関する様々な次元の問題が生じた。植民地政府は、まず統治の対象となる人々を諸々の「部族」に分類し、その部族の土地とそれに割り振られるべき行政区画を策定した。この意味で、今日目にする「部族」ないしは民族集団には、行政官や彼らに援助を与えた人類学者が自分たちの都合によって「創った」側面があると言えるだろう。

多くの小さな人間集団が自立的に移住を続け、かなり自由な集合離散を繰り返して来たアフリカ、特に東部アフリカでは、近代的な「個人」という概念もまた、統治対象の人々やその財産を登録し管理するという行政上の課題から生み出されたと言える。それ以前には、人々はまずどの氏族員であるかという次元で認知された。個として誰であるかが問題となるのは、それに次ぐ次元、特に氏族内部での関係においてであった。

総じて、庶民の間では私有の観念も希薄であり、土地も部族、氏族、リネージのいずれかのレベルで総有されていた。特に、東アフリカの無頭制の平等社会ではその傾向が強かった。不当な攻撃に対して反撃し、復讐して自分の生命と名誉を守り、また困窮時に援助を与えるのは、通例、彼の氏族やリネージ以外にはなかった——年齢組はそれを補った。

しかも、氏族や年齢組のアイデンティティは、往々「部族」の枠組みを超えて広がっていた。即ち、植民地政府が実効的な統治のために排他的に固定化し、絶対視した「部族」

への帰属意識は、実は人々の多重なアイデンティティの一つに過ぎなかったのだ。

「徴税と登録」

東アフリカの英国植民地支配の例では、まず取られた政策は、小屋税と人頭税の形で税を取り立て、植民地経営に要する経費を徴収する事だった。つまり政府は、当初人々の個としての登録を意図したわけではない。

さて、ケニアのキプシギス人には、七つの名前が循環的に現れる年齢組体系がある——連載第22回参照。その各々の年齢組は、それぞれの内に順次作られる数個の副年齢組から構成されており、副年齢組はその形成時に起きた出来事に因む渾名を得る。つい先年消滅した（そして、何年か先に再形成される）ニョング組には、「家に色を塗った者」（1910年頃形成）、「書類を出した者」（同）、「青」（1920年頃形成）という名前の副組があったが、前二者には小屋税と人頭税の導入時期が映し撮られている。入植地（元の自分の土地）に戻って働きたい者の親指には、忠誠の証としては青インクを塗った。そして、キバンデと呼ばれる身分証明書が導入され、登録制度が個々人の管理にまで及ぶのは、その暫く後であった。

「年齢」の創出

登録制度は、「年齢」という近代的な概念をもアフリカにもたらした。それ以前アフリカ各地、特に東部で高度に発達していた年齢組は、多くの場合、ある人間集団内の成員の世代的な関係をむしろかなり自在に調整しつつ大枠で確定する働きをしていた。決して

「一年」という天文学的な単位がその基盤になっていたのではない。「一年」は、その内で経験される具体的な事象に関わりのない、均分できる等質で不可逆な時間、つまり西欧近代の抽象的な絶対時間の片割れである。

だがアフリカの時間とは、具体的な経験を指標に編成されるものであり、経験を離れてはあり得ない「生きられる」時間であった。

年齢という西欧的な概念は、誕生日を基準として単線的な単一の時間尺度の上に全ての個人を並べ、徹底的に分類し、孤立させる。それはアフリカには馴染みのない慣行であり、キブシギスでは、今でも自分の誕生日や正確な年齢を知らない人々に往々出会う。

この事情は、ギニア湾岸でも同じらしい。例えば、ガーナの元大統領クワメ・ンクルマはアカン語諸民族の一つであるンジマ出身だが、「私の誕生日について、ただ一つ確かだと思われるのは、私がエンジマのエンクロフル村に、九月のなかばのある土曜日の昼ごろ生まれたということだけなのである」と記している [『わが祖国への自伝』, 1961]

交響する身体から閉ざされた身体へ

登録という統治の思想は、時間の次元において個々の人を孤絶させたばかりでなく、身体性の次元においても個々の人を他の人々から切り離す結果をもたらした。

アフリカでは、多くの民族が「再受肉」や「魂の再来」の観念を伝えている。つまり、靈魂は不滅であり、先祖の靈魂は新生児へとやって来てその身体を生きるのだ。加えて、身体は他の生きた人々の身体と交響しあうものだった。今、この点について、分かりやすい一例を引いてみよう。ザンビアのンデングバ人を研究したV. ターナーは、現代の精神療法では幾月幾年を要しても完治しがたい精神＝身体的な疾患が治療儀礼によって数時間の内に完治した事例を紹介している [Turner, V., *The Drums of Affliction*, 1968]。アフリカで

は、決して珍しい例ではない。

また、加入礼としての成人儀礼が我々の理解を助けてくれる。それには、割礼をはじめとする激しい試練、ならびに民族集団の倫理と秘密を伝授する教育が随伴する事が多い。しかも、その教育は他律的な知育ではなく、演劇的な儀礼によって内面からの覚醒を目指している。「加入礼の学校」での試練は、若者が自ら渴望するものであり、また短期集中的である点で、工業社会の学校での強いられ、引き延ばされた苦行とは質を異にする。

近代社会では、子供は青春という長々しい移行期の深い懊悩を通して「発達」し、「成長」するとされている。だが、アフリカの伝統社会では、子供は成人儀礼を経て大人へと「豹変」する——まさに青虫が蛹を経て蝶へと羽化するがごとく。それを終えた若者は、精神構造と一切の行動様式を劇的に一変させる。割礼とは、その不可逆性を身体に刻印し、社会に公示する儀礼なのだ。

こうした劇的な治癒や羽化にも紛う成人を可能にするのは、身体が個々の肉体に固く密閉されず、広く深く交響するものとして観念され、また実際そのように生きられているからだ。身体は単なる物ではなく、人々との関係性において存在し、現象するのである。

一方、登録という思想は、個々の人々の身体を歴史的にも、空間的にも他から隔離し、唯一無二のものとして確定し、固定しようとする。即ち、国家による近代的な名前の管理、言い換えれば登録制度に奉仕する近代的な命名法は、身体を肉体というその物理的な境界の内に極限し、物体として取り扱う事にも道を開いた側面をもつ。こうして、人間集団のあり方ばかりでなく、「癒す」論理さえもが根源的な変化を被ってしまったのである。

名前は、決して単なるラベルではない。対象を切り取り、存在させ、支配する。名前の登録とは、名前という力の支配なのだ。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)